

「中1ギャップの解消」に向けての創価教育学の視点  
からの実践と考察  
—「自ら未来を拓く子」の育成のために—

宗像 武彦      加藤 康紀

『教育学論集』第70号

(2018年3月)



# 「中1ギャップの解消」に向けての創価教育学の視点 からの実践と考察

## —「自ら未来を拓く子」の育成のために—

宗像 武彦      加藤 康紀

### 1 研究の背景

筆者が小学校の校長から小中一貫校の校長になり、感じた最初の課題は、いわゆる「中1ギャップ」である。「中1ギャップ」とは、「児童が、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へうまく適応できず、不登校等の問題行動につながっていく事態」（中央教育審議会初等中等教育分科会・平成24年4月23日文部科学省）である。

小学校からの問題行動は少なくないが中学校に入ってから問題行動は顕著に見られる。筆者は小学校の立場から長年子どもたちの育ちを見てきた。いくつか経験した実例を挙げると、中学校に入学して連休明けごろから不登校や授業妨害などの問題行動が見えてきた。不登校気味の生徒は、家庭の状況もあり小学校から休みがちであったが、中学校に入学し標準服を着て順調に登校していたが、連休明けからまた休みがちになってしまった。また、授業妨害をするようになった生徒は、特に女性の先生の授業で目立ち始め「おれ分からねー」と言い授業で落ち着かず妨害するようになっていった。

さらに、特に不登校や授業妨害もない生徒は目立たないが、授業では寝ていて考査等への意欲もない姿が多々見られ、高校進学や社会に巣立つための前に向かう姿勢が見られない生徒たちについても校内対応が必須となっていた。

このような状況で、校内の教員は困惑しつつ具体的な手立てもなかった。筆者の学校は単学級の中学校のため、人的な支援やかかわりも難しく、保護者も不登校や授業妨害等の問題行動をしてしまう生徒に対して協力や関心を示すものの、思春期を迎えた生徒にとって、学校や保護者の直接的なかかわりは煩わしいもので、解決の手立てになり難いものであった。

このような状況の中で、学校の基本理念を「自ら未来を拓く」と決め小中一貫校が開校した。「自ら未来を拓く」児童生徒の育成は、中学3年生で義務教育が終わり、高校入試や社会に巣立つ大事な時、自ら自己と未来を見つめ努力し、さらに未来社会を見つめていくための生き方をベクトルとするものである。

そのために小中の9年間を見据え、学校の基本理念「自ら未来を拓く子」を実現するために、不登校や問題行動、学力不振などを解消するための具体的実践として、小学校教育の取り組みと中学校の対応を行った。

筆者が、このような児童生徒の状況の解決のために指針としたのが、牧口常三郎先生の「創価教育学体系」（以下「体系」という）である。「体系」には、「実際の教育事実を母胎とし、之に科学者としての厳粛なる解剖のメスを加えることにより、獲得する教育理論こそ、永遠的生命を、その根幹に存するものでなければならない。\*1」と述べられており、現場の課題をもとに教育の原理を残していくことの大事さを実感している。

また、「体系」では「創価教育学とは人生の目的たる価値を創造し得る人材を養成する方法の知識体系を意味する。\*2」と述べられている。筆者は、未来社会を生き抜く一人一人の児童生徒の育成「自ら未来を拓く子」とは、「人生や社会でよりよい価値を創造する人材になること」であり「未来を拓く子」と「価値創造する」ことは大いに関係があると考え本研究主題を設定した。

## 2 研究の目的と方法

### (1) 目的

「中1ギャップの解消」に向けての創価教育学の視点からの取り組みとその結果を挙げ考察を加える。小中一貫校における学校理念の「自ら未来を拓く子」の具体化のためにどのような実践をしたかを振り返り考察を加える。

### (2) 目的達成のための方法

目的達成のための取り組みの具体化と検証として、まず、「体系」の記述から確認していく。「余は天上の星を望んで進みつつある危い態度を改めて、先ず脚下を注視せよと、世の教育實際家に訴えるのである。日常の経験をよく反省して成功・失敗の実跡を確かめ、其の過程を分析するならば、其の間に貴重なる真理を見出す事が出来るのである。\*3」と現場からの教育学の視点の重要性を論じている。また、具体的な真理の追究の方策として、「教育の対象の考察の手続きを詳説し、真理探究の一般過程を分析すれば左の如くなるであろう。\*4」として、以下のプロセスを述べている。

- (一) 生活の学問化—特殊事実よりの帰納的研究
- (二) 学問の生活化—演繹的考察、即ち概念の特殊的還元
- (三) 進化論的考察—確認された真理を、歴史的考察をして論証
- (四) 真理の批判的考察—目的観念より観たる真理の判断

本研究では、(一)の「特に目立ちて且記録に値するだけの結果を齎らしたる事実の認識と記憶」「その特殊の結果たる事実の生じたる原因と見做さるべき、特殊なる

生活現象の分析的観察」「平凡単調なる教育生活の中に表れたる少々特殊なる結果を生じたる事実の観察と、其の依って生じたる原因の分析考察」の3点に絞って帰納的研究を進めていく。

次に、以上のプロセスにより、具体的な実践の現場での生徒の姿を通して、「事実の認識の記憶」「特殊なる生活現象」を述べ、「分析的観察」「分析考察」し、そこから「自ら未来を拓く子」の実現のための具体的取り組みを「事実の観察」として検証していく。

### 3 実践と考察

#### (1) 「中一ギャップ」について

##### ① 中教審のとらえ方

前述のように、中央教育審議会初等中等教育分科会 学校間の連携・接続に関する作業部会の「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理（骨子案）」では、「児童が小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活がうまく適応できず、不登校や問題行動につながっている事態（いわゆる「中1ギャップ」）\*5」と述べている。極めて大きい括りの定義であり、列挙されている問題行動は必ずしも「小学校から中学校の進学において、新しい環境」という要因のみによるものではない。

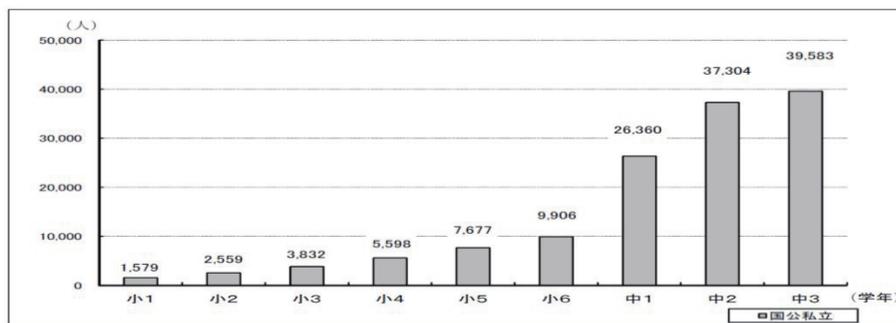


図1 学年別不登校児童生徒数のグラフ

しかし、現実として、平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上に関する調査」結果（速報値）について：文部科学省\*6でも、小学校から中学校への変化の中で、小6から中1にかけての大きい変化を示している。不登校においても同様の大きい変化を示しており、この調査の図1のグラフから9,906件から26,360件と約2.7倍に増えていることがわかる。

また、同調査の問題行動で暴力行為（加害児童生徒）のデータを見ていくと、同調査のデータでは、暴力行為が小6から中1にかけて4,784件から11,503件に2倍以上に増えていることがわかる。

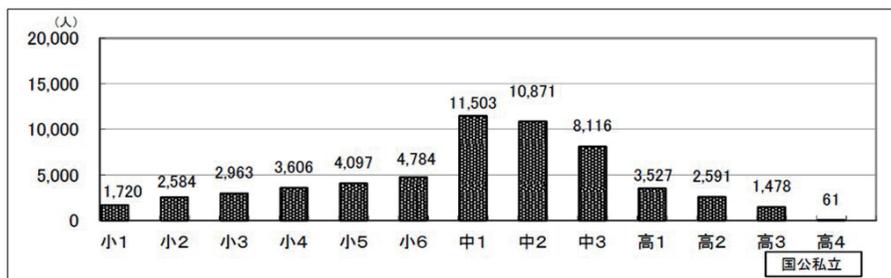


図2 学年別加害児童生徒のグラフ

この事実から、文部科学省としては小6から中1にかけての大きな変化は、「中1ギャップ」として、「小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活がうまく適応できない」ことに起因する状態として把握し対応すべき課題としている。

## ② 滝充氏のとらえ方

元国立教育政策研究所の滝充氏は、国立教育政策研究所紀要第138集の研究ノート「中1不登校調査」再考－エヴィデンスに基づく未然防止策の提案－\*7で、「平成13年度の「生徒調査」によって得られた知見の中で、(中略)「生徒調査」の結果からは、小学校と中学校のギャップは1.3倍から2倍程度であることが明らかになった。(以下図3参照 中略) 平成13年度の中学校1年生の不登校生徒のうち、半数以上の51.3%は小学校状況が「経験あり」群、すなわち小学校4～6年生の間に1回以上は30日以上欠席に匹敵する「不登校相当」の経験があった生徒である。この数字だけで考えても、中学校1年生になった時点では2倍にしか増えないことがわかる。反対に、明らかにそうした経験がなかった「経験なし」群は21.5%に過ぎず、残る3割近くはなにがしかの兆候を示していた生徒と考えられる。そうしたグレーゾーンを

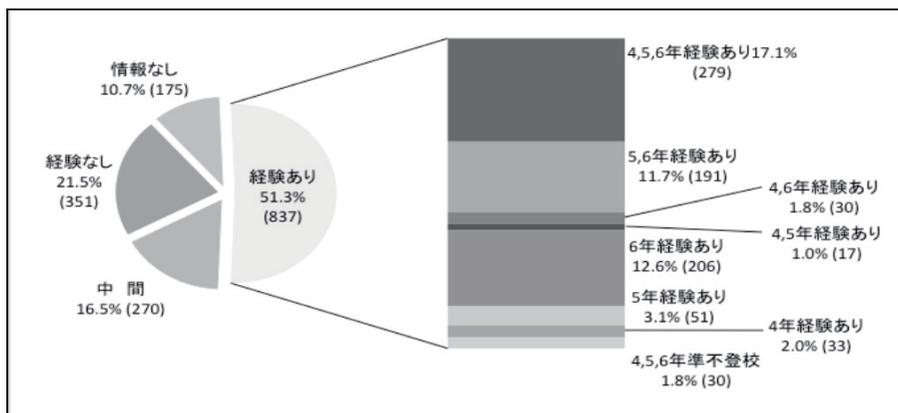


図3 平成13年度 中1不登校 小学校状況構成比

「経験あり」群に近いと判断するなら、小学校と中学校の間にあるとされるギャップも1.3倍程度の増加でしかないと考えられる。」と述べている。

以上、その状況について図3を引用して示した。

この滝氏の「中1ギャップ」の考えから、国立教育政策研究所では、生活指導リーフ『中1ギャップの真実』\*9を発行し対応をしている。

『中1ギャップの真実』では、「中1ギャップ」について考えを示している。以下述べていくと、「中1ギャップの語は、いわゆる問題行動等調査の結果学年別にみると、小6から中1でいじめや不登校が急増するように見えることから使われ始め、今では小中学校間の接続の問題全般に『便利』に用いられています。\*10」と、実際に中1ギャップという言葉は小中の接続の問題の中で使われているが、しっかりとした定義はしていないことが見てくる。

ただし、小学校6年生と中学校1年生の間に、不登校は2.7倍に増え暴力行為は2倍以上増える状況は、「中1ギャップ」という状況を表していくことになりうるような言葉といえるが、生活指導リーフ『中1ギャップの真実』では、引き続き次のような慎重な言葉を述べている。「いじめが中1で急増するという当初の認識が正しいのか、不登校の中1での増加にしてもギャップと呼ぶほどの変化なのかについては、慎重であるべきです。なぜなら、必ずしも実態を表現しているとは言い切れないからです。とりわけ、その語感から、中1になる段階で突然何かが起きるかのようなイメージや、学校制度の違いという外的要因が種々の問題の主原因であるかのようなイメージを抱くと、問題の本質や所在を見誤り、間違った対応をしかねません。\*11」

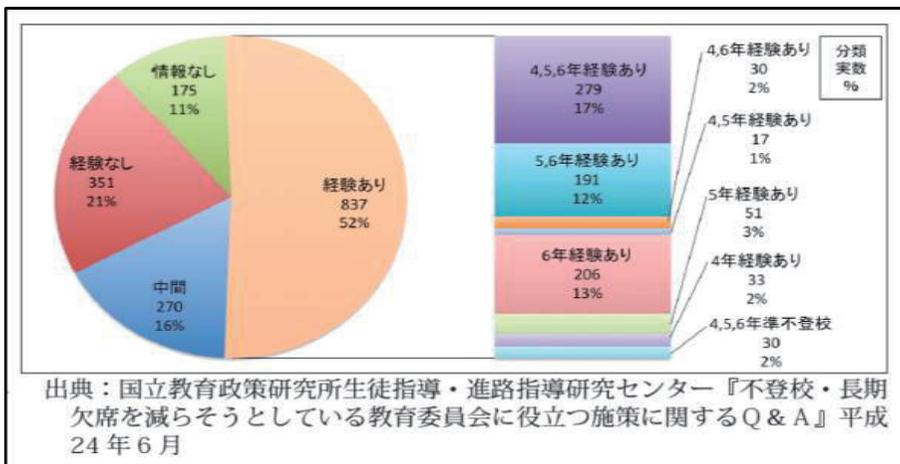


図4 中1不登校 小学校構成比  
(国立教育政策研究所 生活指導リーフ『中1ギャップの真実』より)

上記滝氏の出しているデータをもとに新しいデータ図4を挙げている。\*12

そして、国立政策研究所では「中1ギャップの真実」とは結論として、「(前略)小

学校段階で予兆が見えていたり顕在化し始めていたりする問題であっても、対応できなかったり解決できなかったりという「積み残し」や「先送り」が増えています。一方、中学校でも、そうした小学校の状況を十分に把握しないまま、あたかも中1をスタートラインにできるかのような昔のイメージを脱し切れていない学校が多いのではないのでしょうか。」と述べている。

「中1ギャップ」の考えについて、国立教育政策研究所の『中1ギャップの真実』のリーフレットの結論をまとめて見ると、「小学校段階で予兆や顕在化し始めた問題に対応できなかった」「小学校段階での「積み残し」や「先送り」がある」「中学校段階では昔のイメージを脱し切れていない学校が多い」の3点があげられる。だが、この3点だけで「中1ギャップ」の真実にはなりえない。

それは、小学校段階の「予兆や問題の対応ができなかったこと」や「積み残し」や「先送り」などの言葉でまとめてしまい、より具体的なことが見えていない、本当の「中1ギャップの真実」に迫るためには、より具体的な状況を述べてまとめていく必要がある。

筆者は、以上を踏まえ、「中1ギャップ」について、参考書籍による実践と自ら経験した事例をもとに考察を深める。

## (2) 中1ギャップに関する参考書籍から

### ① 石川晋「中1ギャップー中学校生活になじむ指導のポイント\*13」

石川は、中1の状況が難しくなっているということで、5つのポイントをあげている。<sup>\*14</sup>

- ア 特別な支援が必要な生徒の増加
- イ 新たな仲間とのコミュニケーションが取れない生徒の増大
- ウ 書く・読む・話す・計算する・類推するなどの基本的な学力の低下
- エ 失敗や体験やつまづきを受け止められない生徒の状況
- オ 生活全般への意欲低下と継続する力の弱さ

また、「(前略) 中学校の1年生が5月の連休明けあたりから、登校を渋り始める。登校してきても、疲労を訴えたり、学習に集中できなかったりする。さらには、学習についていけない、友達との関係をうまく結ばず孤立する、部活動になじめない…。\*15」と述べている。

### ② 児島邦宏「中1ギャップの克服プログラム\*16」

児島は、「小・中の連携接続をめぐる問題」の中で、

「1 カリキュラムをめぐる問題 (中略) 第1に、(中略) 小学校段階で重点化され、しっかり積み上がっていないと、中学校での新しい学習内容を習得できないし、自ら探求していくことも難しい。(中略)

2 指導法上の問題（中略）その一つとして、学級担任制から教科担任制へという指導体制の変化があげられる。（中略）2つ目に、授業のスピードの速さがあげられる。

3 生徒指導上の問題（前略）、最も大きな問題としては生徒指導をめぐってである。（中略）中学校では、こうした「慣らし運転」の時間が十分用意されていない。（中略）入学直後の適応指導をどう図っていくかが課題である。

もう一つは、教師と生徒との関係をめぐる問題である。小学校は学級担任丸抱えであり子ども扱いして教師がこまごまと世話を焼いてくれる。ところが中学校に入ると、教科担任制で教科によっては自分の学級担任と週2回ぐらいしかお目にかかれぬ。（中略）さらに、中学校は小学校とは異なり、子どもを大人扱いする。（以下略）\*17]

と述べている。

この文献からは、小学校からの積み上げと小学校段階の重点化の大事さをあげているが、何を重点化するかについては述べられていない。

### ③ 野島一彦「中1ギャップについて思うこと」（月刊『教育と医学』\*18）

野島は、「中1ギャップについて、例えば「つなぎの課題」ととらえるなど諸見解があるが、筆者は「人生の移行（トランジション）の問題」ととらえられるのではなからうかと思う。そもそも人間は、母の胎内で生命が誕生して死に至るまで、何度も移行を体験しながら人生を送る。（中略）その移行は連続的にすんなりいくというわけにはいかない。ある段階と次の段階の間にはギャップがあるので、移行するにはジャンプ力が必要である。そう考えると中1ギャップというのは、小学校から中学校へ移行するためのジャンプ力の不足から生じている現象であると言えよう。

なお移行に必要なジャンプ力というのは、小学校から「離陸する力」と、中学校に「着陸する力」の2つから成り立っている。この2つがうまく働くと移行は成功であるが、一方あるいは両方の力が不足すると失敗ということで中1ギャップとなる。」と述べ、小学校から中学校へのジャンプする力の不足から生じている現象ととらえ「人生の移行の問題」として語られている。

ではジャンプする力とはどのような力か。この具体的なことは、この中では述べられていない。

筆者は、以上の事例から「中1ギャップ」には、小学校でのジャンプ力の不足がある（野島氏）。小学校段階でしっかりと積みあがっていないと中学校の新しい学習内容の習得は難しいし、自らの探究も難しい（児島氏）。特別支援の必要な児童生徒の増加、学力・コミュニケーション・意欲の低下など（石川氏）がある。以上のことが大きく影響していることと理解した。

#### ④ 考察1：「自尊感情」の考え方

中学校段階でのジャンプする力や小学校段階で積みあがっていない土台には「自尊感情」の育みに課題があると考えている。

不登校の未然防止の取組」岡山県教育委員会『教育時報』から「不登校を減らす―未然防止に必要な考え方と効果的な取組―\*19)の中で、滝氏は「学習の基礎・基本の定着を図るとともに「居場所づくり」にとどまることなく「絆づくり」によって自己有用感を育むのは、小中学校に共通した未然防止策である。」と述べている。

滝氏は、自尊感情という言葉を超えて自分自身の有用感（自己有用感）を持つことが絆づくりとなり、社会性を育み不登校の未然防止になるとしている。

ここで、滝氏は「自己有用感」の大事さを述べているが、「自尊感情」や「自己有用感」、「自己肯定感」といわれる考え方の関係についてここで押さえない。

筆者は、「自己有用感」は社会的自尊感情ととらえ、さらに自己的自尊感情は「自己肯定感」ととらえている。滝氏は、不登校の未然防止に「自己有用感」の大事さを述べているが、有用感と肯定感を含めた「自尊感情」が、人として『自立・自律』していくには必要になると考えている。

東京都教職員研修センターの平成20年度の「自尊感情や自己肯定感に関する研究―幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方― \*20)の研究では、「自尊感情は、他者や社会的な基準を内在化することで獲得する優越性と切り離せない感情であるが、大切なことは、単なる優越性ではなく、自他に対する理解ができ、自分の否定的な面も受け入れることである」と考える。その意味では、ローゼンバーグのいう“good enough”の考え方と、研究の求める方向性は一致している。以上のことから、本研究では、自尊感情を自分の否定的な面を受容するとともに、前向きに取り組み、様々な影響の中で自分を見失わず、可能性を信じて行動できる幼児・児童・生徒の育成を目指し、「自分をかけがえのない存在だと思ふ気持ち」ととらえた。」と書かれている。この考えは、筆者の考えに近い。「自尊感情」は、自己を肯定する「自己肯定感」、自己の有用性と他者や社会的基準の内在化の「自己有用感」と考えることができ、前向きに生きていく「自律」と大きく関係性があると考えられる。

#### ⑤ 考察2：「中1ギャップ」の原因をとらえる

「中1ギャップ」の原因について、小中一貫校で見た経験と文献上からまとめると、

- ・小学校段階で学力が積みあがっていない。
- ・中学校での多くの集団による適応力とコミュニケーションが苦手。
- ・特別支援の必要な生徒の増加。
- ・「自尊感情」の育ちに課題があり自分に自信がなく「自律」できていない。

等が主な内容になる。

次に、このことをもとに、筆者が小中一貫校で経験した開校から2年目までの事例

をあげ筆者の「中1ギャップの真実」を考察する。

### (3) 小中一貫校で見た中1ギャップの事例

#### ① Aさんの事例

Aさんは、家庭的な状況から小学校時代から不安定さがあり休みがちなところがあった。ところが中学の連休明けごろから、より休みがちになり、不登校になってしまった。保護者と連絡を取り合い、医療機関にも行き、検査を受けたところIQが65で、特別支援の知的な固定級が適当だということがわかった。でもそうした考えはなかなか保護者には受け入れられず、カウンセラーとの面談での登校、子ども家庭支援センターとの連携などでソーシャルワーカーの派遣などの対応ですすめていた。中学校としては、担任の家庭訪問などの対応のみであった。

#### ② Bさんの事例

Bさんは、小学校時代から学力の課題があり、家庭の状況から自尊感情はあまり高くない。ただ学級では、トラブルもなくさまざまな行事にも取り組み、楽しく学校生活を送っていた。そのBさんが、中学校へ行くとやはり連休明けの5月過ぎ頃から、授業でのおしゃべりが多くなり、とくに女性の先生の授業妨害にまで発展してしまった。学級での授業を受けることができなくなり、通級学級へ週2回、サポート校へ週2～3回通うことになった。保護者は、医療機関や検査に行くことをやっとなり理解し行くことになった。結果を見ると、IQが65で多動傾向にあることがわかった。また自尊感情も高くないことがわかり、その子に合う対応が必要だったが、中学校ではスクールカウンセラーと他校の通級へ通う手だてしかなく、問題行動へ向かってしまう状況にあった。

#### ③ Cさんの事例

Cさんは、学力も普通で家庭もしっかりとしていて、特に問題行動や課題が見られず、小学校時代は、やはり楽しい学校生活を送っていた。Cさんが中学校へ入って、やはり連休明けの5月過ぎ頃、授業での妨害が目立つようになっていた。その状況を現認し、保護者と相談しすぐ医療機関に行くことになった。結果を聞くとCさんは、書くことが苦手で小学校時代は、ある程度担任の先生がわかっていて配慮してくれていた。だが中学校へ入学したら教科担任制で9教科の先生に書くことが大事といわれ、自尊感情が傷つき、授業妨害等の問題行動になってしまったのである。保護者はCさんと共に当時遭った津波と地震の災害の復旧のボランティアをして家族でCさんに向き合った。中学校でも配慮し、無事高校へも進学し元気に登校している。

#### ④ その他の事例

その他の事例としては、学力が課題の生徒が多く見られた。たとえば中間や期末考査で、国語・社会・数学・理科・英語の5教科で見えていくとき、500点満点中100点以下の生徒が1割以上いた。その生徒たちは自学自習はやる気がなく、教科の授業な

どでは寝ていることが多くみられた。自尊感情が低い、その他の行事や部活動などはその子なりに取り組んでいるという生徒が多くみられた。

#### (4) 考察：小中一貫校の事例から

##### ① 「中1ギャップ」の事例から

- ・「小学校段階で予兆や顕在化を始めた問題に対応できなかったこと」とは何か。
  - ・小学校段階での「積み残し」や「先送り」とは何か。
  - ・中学校段階では「昔のイメージを脱し切れていない学校が多い」とは何か。
- を、Aさん・Bさん・Cさん・その他の事例から見ていくと、

Aさんでは、

- ・小学校段階でAさんの課題が見えず、「先送り」になったことで中学校で顕在化した。
- ・小学校段階で、Aさんの課題を早いうちに見つけ対応していくことが大事であること。

Bさんでは、

- ・家庭状況の課題もあるがその中で「自尊感情」の育みができていないこと。
- ・学力の課題は小学校から見えていたが担任任せで、BさんはIQが65で多動傾向があることが中学校に入って分かり、小学校段階から対応できていなかった。

Cさんでは、

- ・小学校段階で課題が見えず担任任せになり、予見や対応ができていなかったこと。
- ・小学校段階でもっと、慎重に一人一人の児童の状況を把握し適切な対応、特に特別支援の視野に立っていくことが必要であること。

その他の事例では、

- ・その他の課題では学力の課題がある。小学校でも予見できたが、その児童にあった対応ができていない。それは、学力の問題は本人の課題であり家庭の問題としてしまっていることで中学校の具体的な課題になっていないこと。

が見えてくる。このことをもとに、前述した「中1ギャップ」に関する文献的資料でまとめたポイントを確認し、「中1ギャップ」についてまとめていくと、

- ・小学校段階で学力が積みあがっていない。
- ・小学校よりもっと大きな集団になるので適応力とコミュニケーション力が不足。
- ・特別支援の必要な生徒の増加。
- ・自分に自信がなく「自尊感情」の育みからの「自律」ができていない。

の4点があげられる。

この石川氏や児島氏・滝氏の言う「中1ギャップ」の状況は、上記のAさんからBさん、Cさん、その他の事例とつながっており、「小学校段階での対応の不足や積

み残しがあり、中学校段階での状況変化に対応しきれない」児童たちになる。

こうしたことをもとに小学校段階で大事な対応を具体的にまとめていくと、

○小学校段階で「自尊感情」を家庭と連携し育て「自律」させていく。

～「自律」(自己コントロール)できる子は、自分自身を大事にしていく「自尊感情」の健全な育みができている。家庭と連携しその子のよさを褒めて育てる「自尊感情」の育みを大事にして「自律」を育む。

○基礎的な学力として、小学校4年生までの「学力」を着実に育む。

～小1から小4は、具体的な知識から、「考える」力を養い読み書き計算の基礎を学ぶ時期である。小4から概念的知識が入ってきて基礎学力をもとに「考えていく」入口になる。この「考える力」が中学校での学力につながるためである。

○小4までの学力の育みが難しい子は「特別支援」の必要性がある。

～学力が身に付かない、読み書き・計算など基礎的なことが身に付かないのは、自尊感情が低く特別に支援が必要な子である。早めにその子に合った育ちを保障していく必要がある。

この3つの視点、「自尊感情」「学力」「特別支援」の目を持って小学校の時期に取り組む事で、「中1ギャップを解消」することにつながると考えることができる。

また、上述した『中1ギャップの真実』の中で、「中学校段階では昔のイメージを脱し切れていない学校が多い」ことが書かれており\*21、中学校での対応も大事である。「中1ギャップを解消」しつつ、小学校と中学校の9年間を見ていくことで一人一人の児童生徒がよりよく育ち「自ら未来を拓いていく子」の育成と土台ができていく。それは自分自身の「人生の価値を創造できる」子を育成する創価教育と大きくつながっており共有項があると考えられる。

以下、そのための小中一貫校での具体的取り組みについて述べる。

(5) 「中1ギャップの解消」から「未来を拓く子」育成の取り組みと実践

「中1ギャップ解消」の取り組みは、小学校と中学校を見通して「中1ギャップを解消」すべく小学校時代の予防的取り組みと中学校でのスムーズな適応のための取り組みで進められる。「中1ギャップ」を乗り越えている児童・生徒の多くは、自尊感情があって自分自身をコントロールできる自律の力と小学校4年生までの学力がついて概念的な知識を習得できる力がある子である。

それは、小学校生活から中学校生活でも自主的に取り組める力があり、自分自身を見つめ高校入試や将来を見つめていくとき、自ら取り組める生徒でもある。

そういう生徒を育成することが「自ら未来を拓く子」を育成することになると考え、開校し2年間の児童生徒の状況・「中1ギャップ」の事例をもとにして、以下のような取り組みを進めた。

① 小学校段階で大事なこと

○特別支援教育を校内全体で取り組むとともに、低学年からのアプローチを保護者の理解のもとに進められるようにする。

- ・就学時健診から、特別支援の大事さを訴え、健診では「こだわり」「多動」などを保護者の理解のもとに、校内の健診項目に入れ、教育相談窓口を作り、保護者との相談体制を早めに組んでいく。
- ・その子の発達上の課題を、スクールカウンセラーと連携し保護者とつながり、早めに把握し、その子に合った指導ができるようにする。

○自尊感情の育みを保護者の理解を得て校内全体で進めていくようにする。

- ・褒めて育てることの大事さを訴え、自己的な自尊感情（自己肯定感）と社会的な自尊感情（自己有用感）が育まれるように、保護者と連携し、校内体制として褒めて育てていくようにする。
- ・自尊感情の育みに課題が見られる場合は、特別支援が必要な子が多く、早めに保護者の理解のもとに、その子の課題と良さを見つめ、良さを伸ばし個に応じた指導ができるようにする。

○学力の基礎とそのために「読むこと」が流暢になるように培っていく

- ・中学校や小学校で学力に課題のある児童や生徒は、読むことに苦手意識のある場合が多いことに気づいた。読むことは小学校の1年生で、「あいうえお」の言葉の学びから入るので、その時から苦手意識がなくなるように、読むことに流暢になるプログラム\*22を低学年から取り入れ、苦手意識をなくしていく。
- ・小4プロブレムといわれるように、小学校4年生で学級崩壊や様々な児童の課題が出ている。その原因の一つに、小学校4年生からの学びの変化が大きく影響している。算数でいうと四捨五入や余りのある割り算、社会でいうと都道府県の学びになり「考えて答えを出す」という具体的な知識を活用して概念的知識化する入り口が小学校4年生になる。そのために小4までの補習等で学びの苦手意識をなくすことが大事になる。そのため学びの難しい児童のために特別支援の視点が必要になる。

以上の小学校の対応とともに、中学校での具体的な対応について、以下述べる。

② 中学校時代に大事なこと

中学校時代は、教科担任制のもとに、授業も1時限50分という時間で、内容が小学校より3倍速く進むという状況がある。さらに15歳の春は高校入試や実際に社会に出ていくという状況があり、そのためには一人一人の生徒が「自学自習」や「自主・自律（立）」が小学校からできることが必要である。だが、それを超えて小学校から様々な児童が来ることを予想し、柔軟な校内体制を組んでいくことが必要になる。

○特別支援体制を校内で組んでいく

筆者は、中学校での特別支援の校内体制を見たとき、実際にはなかなか進んでいると言える状況ではないと思った。そのために、市教育委員会と連携して「情緒の通級学級」を設置することとした。その学級を充実させ生徒がよりよく育っていくには、小学校時代の高学年で、学びに苦手意識のある児童などは、スクールカウンセラーと担任と連携し、中学に向けて自分の良さや課題を知ることが大事である。保護者の理解のもとに、小学校段階から早めに通級学級への手立てをとるようにした。

#### ○自学自習ができる校内体制の確立

中学校は部活動を盛んにして、自学自習ができる環境で「自主・自律（立）」できるようにするためのものが必要である。そのために「補習塾」等の自ら学んでいく環境と部活動とを両立できるよう工夫し、校内体制として創っていく必要がある。「補習塾」では、自学自習を主に進め漢字検定や英語検定、数学検定などにもチャレンジできるようにした。

#### ○課題のある生徒のために地域を交えた「支援体制」の確立

不登校や問題行動などが出てしまった場合、中学校では、生活指導担当や担任や学年任せになってしまうことが多々見られる。これでは課題の解決やより良い育みのための方向性を、組織的に進めることができず見えにくいところがある。さらに、その生徒自身の健全な育成は3年間という短い期間ではあつという間に過ぎてしまい難しい面がある。そのためには地域の力をもらい、育成指導員や民生児童委員、地域子ども家庭支援センターなどの協力で「支援会議」を組織し、校内では生活指導主任や担任、スクールカウンセラーも入り具体的に取り組むようにした。

## 4 結果と考察

### (1) 小中一貫校でのデータで見る状況の変容

以上のような取り組みは、「中1ギャップ」といわれる状況を目の当たりにして、それをなくすための予防的な取り組みを小学校で行い、中学校で学びや生活することの難しさを感じ登校している生徒を、「自ら未来を拓く子」に育成するために取り組んだものである。この実践は、「特別支援」「学力」「自尊感情」の3つのキーワードで取り組んだ。以下成果を見ていく。

#### ① 「特別支援」の成果

「特別支援」の成果が見えるのは、「中1ギャップ」における不登校や問題行動になる。開校して3年目以降5年目まで、

##### ・不登校や問題行動はゼロ

で、現在の状況を聞くと現在も同様であるとのこと。安定した子どもたちの育ちの姿が見られる。また、「自尊感情」「学力」は、以下のデータでその効果を検証していく。

## ② 小学校の成果

小学校4年生の学力の変化が大事なので、開校前の平成21年度と開校後平成25年度小学校4年生の八王子市学力調査\*23から見ていく。

### ア 自尊感情の項目

- ・「努力をすれば自分是可以る。自分を伸ばしたい。」

平成21年度 肯定的考え 81.0%	→	平成25年度 92.5%
平成21年度 否定的考え 16.7%	→	平成25年度 7.5%

- ・「自分にはなりたい職業がある。将来の夢について具体的に考えている。」

平成21年度 肯定的考え 78.5%	→	平成25年度 85.0%
平成21年度 否定的考え 23.1%	→	平成25年度 15.0%

### イ 学力の状況

- ・国語

#### \*正答率

平成21年度 56.3% (市 63.9%)
→ 平成25年度 76.6% (市 61.2%)

#### \*国語が好き・先生の話をよく聴いているの項目

平成21年度 54.8% (市 60.8%)
→ 平成25年度 87.5% (市 89.5%)

- ・算数

#### \*正答率

平成21年度 62.3% (市 73.3%)
→ 平成25年度 68.1% (市 66.3%)

#### \*算数が好き・先生の話をしっかり聴いている

平成21年度 57.1% (市 71.4%)
→ 平成25年度 92.5% (市 92.5%)

## ③ 中学校の成果

26年度は中1が都学力調査\*24でとっている。そのデータから中学校の状況をみていく。

### ア 自尊感情の項目

～一貫校になった平成22年度と26年度のデータで見ていく

- ・自分は友達を大事にし、理解してくれる友達がいる。

平成22年度 肯定的考え 61%	→	平成26年度 88.9%
平成22年度 否定的考え 18%	→	平成26年度 11.2%

- ・自分は決まりを守っている

平成22年度 肯定的考え 55%	→	平成26年度 83.4%
平成22年度 否定的考え 36%	→	平成26年度 16.7%

## イ 学力の状況

- ・国語

\*正答率

平成22年度 66.7% (都 73.1%)
→ 平成26年度 55.7% (都 60.1%)

- ・数学

\*正答率

平成22年度 44.4% (都 56.5%)
→ 平成26年度 47.6% (都 53.8%)

というデータが見られ、小中一貫校での実践の状況と成果が一部数値的な部分であるが見ることができ、小学校段階での未然防止の具体策が「中1ギャップを解消」し、「自ら未来を拓く子」の育成につながるが見えた。

(2) 「中1ギャップの解消」と「自ら未来を拓く子」の育成のために

「中1ギャップの解消」について、もう一度そのポイントをあげると

- ・小学校段階で「自尊感情」を家庭と連携し育て「自律」させていく。
- ・基礎的な学力としては、小学校4年生までの「学力」を着実に育む。
- ・「自尊感情」と小4までの学力の育みが困難な子には「特別支援」の必要性がある。

この3つの視点をあげることができる。

これら、「自尊感情」「学力」「特別支援」の目を持って小学校の時期に取り組む事で、「中1ギャップ」を未然に解消することにつながるが見えた。中学校での対応も自尊感情や学力にも効果が見られ、小中を見通した取り組みで児童生徒の変容になり、「自ら未来を拓く子」の土台になりうることが見えた。

以下、この小中一貫校での実践から検証した具体的取り組みのポイントと、創価教育学との関係性について述べていく。

### (3) 創価教育学と小中一貫校での実践

「尚一步進めて論ずるならば、第一は啓発すべき心の研究、即ち学習力の研究で、その中には年齢に基づく発達段階の、研究があり、それを側面若しくは縦断面と命名するならば、これに対して平面若しくは横断面と名付けられるべき、知、情、意等の研究がある。これらの研究も又教育学組織内容の重要性を帯びて居ること言を俟たないのである。<sup>\*25</sup>」**「体系」**

今回の実践では、発達段階に即した研究、すなわち小中の「中1ギャップを解消」すること、中学校を視野に、小学校の各学年の横の断面での知情意の取り組み・実践をする視点を大事にした。

また、特別支援の対象の児童生徒の把握は、医学的な観点が大事である。対象児の必要に応じて治療的行為を進めつつ、学校と家庭の状況を把握しつつ適切な環境調整を進めていくこと。校内では、その子の教育ニーズに合った取り組みをすすめることでより健全な育みができていく。特に、「体系」に於いては「これに就いても、羨ましきは医学社会である。医学と教育学は兄弟のごとき応用科学である。<sup>\*26</sup>」と述べられ、教育学に应用科学としての実証性や積み上げの必要性が述べられている。

一貫校で見た「中1ギャップ」といわれることについて、横の断面である知情意についてAさんからCさん、その他の事例から述べた。また、小学校段階と中学校段階という縦の断面の発達段階について、小中の9年間を見ていくことができたと考えている。

「**体系**」では、「**教育の目的は被教育者の価値創造の涵養するにあり<sup>\*27</sup>**」と述べられている。小中の9年間を見つつ、3つの視点で取り組むことで児童生徒自身が自律（立）し、自分の人生の「価値創造していく」「自ら未来を拓く子」の土台となり、「価値創造する」子の育成へとつながることが見えてくる。

## 5 まとめ

「中1ギャップ」を無くしてより良く育み「自ら未来を拓く子」を育成するためには、小学校教育の低学年のうちから一人一人の児童の状況をつかみ適切にかかわり組織的に取り組んでいくということが大事である。

今回の事例と検証データによって、小学校段階での児童一人一人が自律（立）の土台ができることを確認できた。それは9年間を見通して小中学校段階で「特別支援」「自尊感情」「学力」をキーワードにして、適切な校内体制を組んで取り組むと学校全体が落ち着き、児童生徒自身に自尊感情と学力も育まれて「自ら未来を拓いてい

く」土台になるということである。

前述した「体系」では、発達段階に即した縦の取り組み（縦断面）と、その学年でしかできない横の取り組み（横断面）の実践と研究が大切と述べられている。「体系」をもとに小中一貫校での実践は、小学校段階での大事なことと中学校段階での対応の実践例は、小中がつながった9年間の見通し（縦断面）を持ち、その経験則で小学校教育と中学校教育（横断面）を実践したところで実証的な効果が見えてきたことである。

今後の課題として、「特別支援」の児童生徒の変容をより具体的に示しつつ数値的なデータで取り上げることでさらに3つの視点に実証性を上げることにする事が挙げられる。

また、「自ら未来を拓く子」と「価値創造すること」の関連性と実証的検証である。筆者は一校長として、テーマ「自ら未来を拓く子」のより具体的な姿とそのためのさらなる具体的な方策が、これらの課題を検証する先に見えてくると考えている。

#### 注

- 1 牧口常三郎著『創価教育学体系』聖教新聞社 1930年11月 I巻29頁
- 2 同 I巻19頁
- 3 同 I巻26頁
- 4 同 I巻90～91頁
- 5 中央教育審議会 初等中等教育分科会学校間の連携・接続に関する作業部会「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理（骨子案）」平成24年4月
- 6 文部科学省「平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（速報値）について（図1・図2）平成29年10月
- 7 滝充編「中1不登校調査」再考－エビデンスに基づく未然防止策の提案－ 国立教育政策研究所紀要 第138集 平成21年3月
- 8 同 図3 平成13年度 中1不登校 小学校状況構成比 7頁
- 9 文部科学省 初等中等教育局児童生徒課－国立教育政策研究所 生活指導リーフ『中1ギャップの真実』平成26年4月
- 10 同 2頁
- 11 同 2頁
- 12 同 3頁
- 13 石川晋・石川拓・高橋正一著『中1ギャップ－中学校生活になじむ指導のポイント』学事出版 2009年
- 14 同 11-12頁
- 15 同 14頁
- 16 児島邦弘・佐野金吾編『中1ギャップの克服プログラム』明治図書 2009年

- 17 同 14-16 頁
- 18 野島一彦編「中1ギャップについて思うこと」『月刊教育と医学』58巻第3号  
慶応大学出版会 2010年 2-3頁
- 19 滝充編「不登校を減らす－未然防止に必要な考え方と効果的な取組－」『教育時  
報』巻頭論文 岡山県教育委員会 平成17年
- 20 東京都教職員研修センター紀要『研究紀要第8号』平成21年 7頁
- 21 文部科学省 初等中等教育局児童生徒課－国立教育政策研究所 生活指導リーフ  
『中1ギャップの真実』平成26年 2頁
- 22 海津亜希子編著『多層指導モデルMIM 読みのアセスメント・指導パッケー  
ジ』2010年
- 23 八王子市教育委員会 学力調査 平成21年度・平成25年度
- 24 東京都教育委員会 学力調査 平成22年度・平成26年度
- 25 牧口常三郎著『創価教育学体系』聖教新聞社 1930年11月 I巻117頁
- 26 同 I巻49頁
- 27 同 I巻229頁

**Examining Practices to Resolve  
the “Junior High School First Year Gap” from  
the Perspective of Soka (Value-Creating) Pedagogy  
Fostering “Children who Pave Their Own Paths to the Future”**

**Takehiko MUNAKATA Yasunori KATO**

The author, a principal of a merged public elementary and junior high school, noticed that elementary school children who did not have major issues in school, began showing signs of problematic behaviour and absenteeism upon entering junior high school. This issue is referred to as the 中1ギャップ *chu-ichi gyappu* [the transitional “junior high school first year gap” between elementary and junior high school education]. This paper discusses an attempt to resolve this issue based on the theme of fostering “children who pave their own paths to the future.”

Causes of the “junior high school first year gap” are examined and the effectiveness of practices implementing concrete strategies to resolve the issue based on literature and previous studies are discussed. The author’s views are based on Tsunesaburo Makiguchi’s educational perspective of “living a life of value-creation” found within his value-creating pedagogy, Soka Education.